

腑に落ちることがいくつもありました。

第8回：「審議会の不思議」の政治学

武田裕子（医師，大学教員）

森田 朗 先生

明快かつ示唆に富むご講義をありがとうございました。

大学の退屈な会議から、利害関係のからむ委員会、思いのこもった学会の理事会まで、参加して感じていたことに新たな枠組みを頂いて、腑に落ちることがいくつもありました。

答えが「ゼロか、1」でないときに、どれだけ歩み寄れるかは本当に大事だと思います。生物界で多様性が種を滅亡から救っているように、小さな組織から国の行く末に至るまで、多少の誤りがありつつも滅亡せずに進むには、少数派を無視してはいけない・・・と、たいていの場合に少数派の私は思いますが、なかなかそうもいきません。

でもだからといって拒否権を発動して辞めるのは、会議を壊すことにはなっても何も得られないという先生のお言葉に、粘り強くなくてはとあらためて思いました。

日々の診療に直接関係する「中医協」の決定のプロセスを垣間見させていただいて、ゆきさんのコースを取っていてよかったと心から思いました。考えていた以上に丁寧に議論されていることを感じて、少し安心しました。

以前はテーブルを挟んだ同士がやりあっていたのが、今は同じ側に座るものがやり合わなくてはならないという「たとえ」もたいへん分かりやすかったです。

にもかかわらず、医療者も受け手の国民も、総額が決まっていってそのなかで厳しくやり繰りすることになっていることを、あまり認識していないのではと思いました。

例えば、話題にされていた、超高額ながん治療薬 ニボルマブも、自分が患者だったら使用できるのかという会話はあっても、誰かがそれを利用することで、自分の受ける医療が影響を受けるという議論には進んでいないように思います。

「公益委員」を務めるには様々な「識」を必要としますが、普通の人視点を入れて、その「普通の人」にご自身の背後にいる保険加入者に向かって分かりやすく発信してもらおう、というようなことはできないものかと思いました。

ちなみに英国のNICEには、患者代表の委員も入っておられます。

今回のご講義、これからまだまだ会議への参加が続く私にとって、また、ときに司会を担当する立場で、本当に得難いものでした。

「会議の政治学」は、アマゾンでは本日の時点でまだⅠとⅡのみが購入可能ですが、きっと全3巻拝読します。ありがとうございました。